

若者が今なすべき事 ～視野を広げる～

山口県立山口高等学校通信制 今村香音

今、世間で問われている若者に関する問題は、どれだけあるのだろうか。少子化、低所得者の増加、政治の関心度の低さ、就職難、不登校者、社会活動に参加しない人の増加……。例を挙げればきりが無い。このようなたくさん問題は、どうすれば解決、または改善されていくのか。その方法について、私の考えを述べたいと思う。

まず、若者の定義について考える。青年という言葉に置き換えると、青年期は15歳～24歳までを指す。「青年」と名のつく団体の年齢条件では、20歳～39歳、20歳～40歳、45歳以下など、バラバラである。また、心理学的には34歳頃まで、医療においては15歳～39歳までと言われている。厚生労働省の若者雇用のデータでは、青年は15歳～34歳と記してあった。このように、様々な見解があるため、ここでは最も一般的である15歳～24歳までのことを若者として考えることにする。

私の考える若者の今なすべき事は、視野を広げることである。なぜなら、高校生になって視野の広がった私は成長したと断言できるからだ。現在私は、通信制の高校に通っている。通信制とは、一定回数のレポートとスクーリングを経てテストを受け、単位を修得する制度である。全日制の高校とは違い毎日授業はなく、生徒の年齢も服装も様々だ。元々、全日制の高校に通うつもりだったが、当時心身共にボロボロで不登校だった私は毎日通学する自信はなく、通信制高校への進学を決めた。入学当初の私は、病気の影響から午前中で疲れ切ってしまうくらい体力がなく、また人の視線に過敏になっており、終始びくびくしていた。入学して1か月くらい経った頃、たまたまスクーリングで近くの席になった女の子が声をかけてくれた。彼女は私より1つ年上だったが、とても話やすくその日が楽しくなったことを覚えている。それからは、授業を一緒に受けるようになったり、休日に遊びに行くようになったり、とても仲のいい友達になった。そして、そんな彼女と一緒に過ごすうちに、私の心にはゆとりができるようになった。すると、肩の力が抜けて、一気に視界が開けたような気がした。このように心に変化したことで、徐々に行動も変わるようになっていった。今まで興味のなかったことに挑戦してみたり、くだらないことで笑いあったり、腹を割って真剣な話をしたりと、以前の私なら避けていたようなことをたく

さんするようになった。そして、一回変わった心と行動はさらに変化し続けた。通信制で彼女以外の友達ができ、生徒会に入った。積極的に話し合いに参加し、自分の意志を伝えることに不安はあっても、恐怖はなくなった。また、地域のボランティア団体へも加入し、様々な年代の人と関わりを持つようになった。こうして、内面的な部分が変わっていくと共に、外見も変わった。体重が増えたことで体力も回復し、病院に通う必要がなくなった。以前はよく顔色が悪いと言われていたが、今はその面影すらない。髪型や服装も明るいものになった。病院の担当医からは、別人みたいだねと言われる程の変わりようである。

どうして私がここまで変わることができたのか。それは、簡潔に言うと視野が広がったからだ。同じ状況に置かれている友達ができ、彼女達のことを知るうちに、過去に辛い思いをしたのは私だけじゃないと分かった。通信生はみんな、何かしらの事情があつてここに通っている。その痛みだったり、楽しさだったりを共有できることに、私は安心感を抱いた。素の自分を受け入れてくれることが、何よりも嬉しかった。だから、自然と周りの目を必要以上に気にしなくなっていた。今まで張りつめていた神経がふっと緩んだことで、自分以外のものに目を向けることができるようになったのだ。通信生は、それぞれ自分の世界を持っていて、私は新しい世界に飛び込んだような感じがした。視点が独特だったり、考え方が驚かされるものだったりして、話を聞くのがとても面白いし、わくわくする。心に余裕ができたことだけでなく、今までと違う「通信制」という場所だったからこそ、私はもっと視野が広がったように思う。

私は視野が広がり、様々なことに挑戦し考えていく中で、特に精神面で大きく成長できたように思う。もちろん、教科書を使ってする「勉強」も大切だ。しかし、その勉強だけに捉われるのではなくて、一見無駄に思えることでも知って見て経験することは、後の自分にとって大きな財産になるのではないだろうか。

では、次に視野を広げることが大切と考える客観的な事実を挙げる。初めに挙げた「若者に関する問題」の中から特に、18歳選挙権が適用されたこともあり、政治の関心度の低さと、自分自身が不登校だったことより不登校者について具体的に説明する。

まず、政治の関心度の低さについてだ。内閣府の「平成 25 年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」によると、政治に関心があるかという問いに「ある」と答えた人は 50.1%とある。諸外国の数値では、ドイツ 69%、韓国 61.5%、アメリカ 59.4%となっている。7か国で比較してあるのだが、日本の数値は下から 2 番目であり、関心度の低さがうかがえる。また、「分からない」といった回答も 7.3%あり、自分の意思表明を避ける人

が多いことも分かる。他に、「社会をよりよくするため、私は社会における問題に関与したい」や「将来の国や地域の担い手として積極的に政策決定に参加したい」といった項目では、「そう思う」と答える人は44.3%と35.4%しかいなかった。いずれも半数以上の人は、政治に関わる行動を積極的に行おうという意志がないことが分かる。実際の選挙の投票率という点で見てみよう。総務省によると、平成26年12月に行われた第47回衆議院議員総選挙では、全体の投票率52.66%、20歳代の投票率32.58%とある。全体の投票率も低いものではあるが、やはり20歳代の数値の低さは圧倒的である。関心度や投票率の低さの原因についてだが、政治は難しいものとしてどうしても敬遠されがちであるのが1番だろう。また、政治の良くない面がメディアに取り上げられがちなこと、あまり良いイメージを持ってない人も多い。

次に、不登校者についてだ。内閣府の平成26年度版子ども・若者白書によると、平成24年度の高校生の不登校者数は57,664人であり、全体の1.72%の割合にあたる。学校数の面でいうと4,587校、82.2%の高校に不登校者は在籍しているとも記してある。不登校者の人数の推移という点でみると、横ばいに近いが、少し増加傾向にあることも見てとれる。データで不登校の原因として多かったのは、1番が無気力、2番が不安など情緒的混乱、3番にあそび・非行とあった。他に、友人関係や学業の不振といった原因も挙げられている。

では、今まで挙げたこの2つの問題について、どうすれば改善されるのだろうか。私は、共通して視野を広げることが大切だと考える。政治の関心度の問題も、不登校者の問題も自分の立場の考えのみに目がいつているように見える。まず政治の問題だ。データに戻るが、「子どもや若者が対象となる政策や制度については子どもや若者の意見を聴くべき」という問いにそう思うと答えた人は、67.7%もいた。これは、他のどの問いより圧倒的に数値が高く、自分に関係があることには関心があると言っているのと同義のように思える。要するに周りが見えていないのだ。でも、少し視点を変えてみると政治で自分に関係のないことはないということに気付けるだろう。そのことに気付けば、少しは政治について知ってみようと思うのではないだろうか。次に不登校者の問題だ。人間関係が原因だった場合、それは相手の意見を聞いてなかったり、理解しようとする姿勢が足りなかったりすることが多い。相手の意見を尊重しようと思えること、第三者の視点から物事を見ようとするのが大切なのだ。また、精神的な面が原因だった場合、考え過ぎて悪循環にはまっていることがある。そういう時は違うことに目を向けて一度フラットな状態になってから、

物事を考えると少しは改善されることもある。ちょっと立ち止まって、視野を広げれば新しいものが見える。すると、どちらの問題も少しずつ改善されると、私は考えた。

さて、ここからは視野を広げる方法について説明する。

1番大切なのは、様々な経験をする事だと考える。学校生活の中で考えるならば、部活動や委員会などに参加することだ。これらは、1つのことについてより深く知ることができたり、たくさんの仲間に出会ったりすることができる。また、行事に向けて必死になって取り組んだというような経験は、友達との絆が深まったり、忍耐力が強くなったりとたくさんの面で自分を大きく成長させてくれる。いろんなことを考え、感じ、行動したことで、物事の見方考え方も広がるはずだ。社会活動の面で考えると、ボランティアに参加することだ。ボランティアは、活動する側が見返りを求めない、つまり無償とする奉仕活動である。震災等の災害ボランティアのイメージが強いかもしれないが、実際は子どもや高齢者と交流したり、道路や公園、海岸等の清掃活動だったり、多岐にわたる。そこでは、様々な環境と人に出会えるはずだ。目を反らしたくなるような状況に直面することがあるかもしれない。しかし、そういったことを直接自分の目で見て知った時、考えさせられることも多いだろう。また、自分と違う年代の人とコミュニケーションをとることで、今まで知らなかった世界に触れることができるかもしれない。そういった経験は、知識が増えたり、自分の考えが柔軟になったりや自分の内面的成長として表れてくるはずだ。加えて、どんなことでも未知の体験をすることも大切だと考える。友達と買い物に行くことや家事を手伝うこと等、些細なことでも初めての体験には新しい発見があるはずだ。その発見したことが積み重なって、また新しいことに気付くこともあるだろう。そうして、どんどん視野は広がっていくのだ。

次に大切なのは、積極的に情報収集を行うことである。具体的には、テレビを見たり、ラジオを聞いたり、インターネットを使ったり、本を読んだりといったところになる。そういった中で私が特に大切だと考えるのは、新聞を読むことだ。1つの物の中に様々なジャンルの情報が載っているため、満遍なく情報を吸収することができる。また、使われる表現には難しいものもあるため、それを理解し活用するきっかけにもなるだろう。加えて、新聞には読者の投書欄がある。つまり、自分と同じ読者の立場からの意見を聞くことができるのだ。社会への意見だけではなく、自分の経験やある出来事に対して考えたこと等数々の記事が載せられている。これは他のメディアにはないことであり、新聞の大きな特徴と言える。このようにして情報収集をすることで、知識は確実に増える。すると、その知識

がどのようなものであれ、理解できる事柄は多くなるはずだ。したがって、物事に対して多面的な考察ができるようになる。視野を広げることに大いに繋がるだろう。

視野を広げること。それを私はここで、社会で若者に問われる問題を解決する方法として挙げた。しかし、視野を広げることですぐに問題が解決するかというそうではない。一人ひとりが問題を考え解決しようと「思い、行動に移す」ために、私は視野を広げるべきだと言いたいのだ。問題を解決するというと大きなことに聞こえるが、どんなことも小さなことが積み重なって大きなものを生む。だから、視野を広げるという小さなことを繰り返して、人間的に成長することで、物事を考えられるようになっていき、結果的に問題解決に繋がると思われる。

以上のようなことから、私は若者が世間に目を向ける第一歩として、視野を広げることを提示したい。